

子宮頸がん予防ワクチン（HPV ワクチン）の説明書

ヒトパピローマウイルス感染症とは

ヒトパピローマウイルス（HPV）に感染しても、多くの場合はウイルスが消失しますが、一部の人で前がん病変を経て、浸潤がんに至ることがあります。子宮頸がんの 50～70%は、HPV16、18 型が原因とされています。子宮頸がん罹患者は 20 代から増加し、40 代でピークを迎え、年間約 11,000 人が発症し、年間約 2,900 人が死亡する重大な疾患です。ワクチンで HPV 感染を防ぐとともに、前がん病変を予防する効果が期待されています。

ワクチンの種類とワクチンの効果

サーバリックス

ヒトパピローマウイルス（HPV）16 型と 18 型の感染や前がん病変の発症を予防します。

- 1 回目から 1 か月以上の間隔をあけて 2 回目を接種
- 1 回目から 6 か月以上の間隔をあけて 3 回目を接種

ガーダシル

ヒトパピローマウイルス（HPV）6 型、11 型、16 型、18 型の 4 つの型のウイルス感染を防ぐことができ、子宮頸がんとその前がん病変、外陰上皮内腫瘍、膣上皮内腫瘍、尖圭コンジローマなどの発症を予防します。

- 1 回目から 2 か月以上の間隔をあけて 2 回目を接種
- 1 回目から 6 か月以上の間隔をあけて 3 回目を接種

シルガード 9

ヒトパピローマウイルス（HPV）6 型、11 型、16 型、18 型、31 型、33 型、45 型、52 型、58 型の 9 つの型のウイルス感染を防ぐことができ、子宮頸がんとその前がん病変、外陰上皮内腫瘍、膣上皮内腫瘍、尖圭コンジローマなどの発症を予防します。

【2 回接種の場合】（1 回目の接種が 15 歳未満に限る）：6 か月以上の間隔をあけて 2 回接種。

【3 回接種の場合】

- 1 回目から 2 か月以上の間隔をあけて 2 回目を接種。
- 1 回目から 6 か月以上の間隔をあけて 3 回目を接種。

ワクチンの副反応

- 頻度 50%以上：注射部分の痛み・赤み・腫れ、疲労
- 頻度 10%以上：かゆみ、腹痛、筋肉の痛み、関節の痛み、頭痛等
- 頻度 1～10%未満：じんましん、めまい、発熱等
- 頻度 1%未満：注射部分の感覚異常、全身の脱力
- 頻度不明：手足の痛み、失神、リンパ節症等

※低頻度に、重い副反応としてアナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎、ギラン・バレー症候群が報告されています。予防接種を受けたあと、副反応がおこった場合は医師の診察・治療を必ず受けてください。

受けることができない人

- 明らかに発熱している人（通常は 37.5℃を超える場合）
- 重い急性疾患にかかっている人
- このワクチンの成分によってアナフィラキシー（通常接種後 30 分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応）をおこしたことがある人
- 妊娠中もしくは妊娠している可能性のある人
- その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいといわれた人

予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなければならない人

- 血小板が少ない人や出血しやすい人
- 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある人
- 過去に予防接種を受けたとき、接種後 2 日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状がみられた人
- 過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある人
- 過去に免疫状態の異常を指摘されたことがある人、または近親者に先天性免疫不全症の方がいる人
- このワクチンに含まれる成分にアレルギーをおこすおそれのある人

ワクチン接種後の注意

- 接種後に、めまいやふらつき、失神、重いアレルギー症状が起こることがあるため、接種後 30 分間程度は副反応症状に注意してください。
- 接種後は、接種部位を軽くおさえる程度にし、揉まないようにして、清潔に保ちましょう。
- 接種後翌日までは、過度な運動を控えましょう。
- 接種当日の入浴は問題ありませんが、注射部位を強くこすことは避けてください。
- 接種部位以外にも激しい疼痛、しびれ、脱力等があらわれ、長期間症状が持続する例があります。異常が認められた場合には、医療機関を受診しましょう。

ヒトパピローマウイルス感染症～子宮頸がん HPV ワクチン～

URL : <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/index.html>